

日本の現代建築・彫刻・街並みを国内外に伝え、 その空間を鋭く定着した業績

村 井 修 殿

日本を代表する写真家として、鋭く研ぎ澄まされた感覚によって、丹下健三氏、白井晟一氏をはじめとする多くの日本現代建築家の代表作を撮影。他に比類することができない質の写真を残した。さらに流政之氏、澄川喜一氏等の現代彫刻を撮影。世界の街や広場、都市を詩情あふれる風景・環境としてとらえた一連の写真展と多くの著作は、建築と都市、日常生活と芸術の関係を的確にとらえ、広く社会に建築とその周辺の空間の価値を伝え続けている。ものと空間の魅力そのものに迫り、構成と比例を重視し、光と影を確実にとらえるその作風は、深く不変で、実際の建築や街自体の価値を超えて写真世界そのものの価値を創造したともいわれている。

展示会としては、1982～84年に開催された“建築へ彫刻へ”（名古屋・東京・ソウル）を皮切りに、“世界の広場と彫刻”（1986～87年、日本全国）、“石の記憶展”（1990年、北海道）、“HARMONY”（1993年、ハーバード大学・日本全国）、“REMEMBRANCES IN STONE”（1994年、ニューヨーク）、“パリ・都市の詩学”（1997～98年、東京・大阪・名古屋）、“港町グラフィックス”（1999年、東京）、“シドニーオペラハウスの光と影”（2001～02年、東京・大阪）、“東京 - 街の余白”（2003年、東京）、“HARMONY”（2005年、ローマ・テラモ）、“金寿根の建築”（2006年、ソウル）、“都市の記憶”（2006年、東京）等があり、さらに写真著書として1970年の“旧帝国ホテルの実証的研究”（明石信道著、東光堂）以来建築写真集、彫刻写真集、街並みに関わる写真集など主だったものだけでも計21冊の大著作に関わられ、建築と空間の魅力を歴史に留めている。

さらに1968年から90年に至るまでは、東京写真大学で後進の教育にあたられるとともに、多くの優秀なスタッフを育て、日本の建築写真の基礎の確立に多大なる貢献をおこない、また、1967年からは『LIFE』誌の連載テーマ“家族”の日本編を担当するなどタイム・ライフ社の撮影に従事するとともに、先述のとおりニューヨーク（1994）・ローマ（2005）・ソウル（2006）をはじめとする海外での写真展を通じて、日本の建築と彫刻、街並みの価値を世界に伝え続けた。

1953年より50年を超える長い期間にわたって、常にフリーな立場で建築と美術と街並みを対象に、第一人者として現役の活動を続けてこられており、現在も重要な建築関連賞の審査員をされるなど建築界と社会に独自の芸術的視点で貢献されてきた業績は、他に比類するものがなく、まさに日本建築学会文化賞にふさわしい業績である。

よって、ここに日本建築学会文化賞を贈るものである。